君に永遠の愛を　－人形師　源十郎－

”太った猫”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に永遠の愛を　―人形師　源十郎―

【Ｎコード】

Ｎ４４６５Ｃ

【作者名】

”太った猫”

【あらすじ】

今回のヒロインは人造人間（リビング・デッド）小夜子

プロローグ（前書き）

ＣＡＵＴＩＯＮ！
これは決して死者を冒涜するお話ではありません。

プロローグ

目覚めると、そこはゴミ置き場だった。そういえば今日は一月曜日（生ゴミ）の日だったなぁと、のほほんと彼女は考えた。

ー某月某日某所での会話ー

「間違い、ないのだな」
光さえもどこかに吸い込まれてしまったような薄暗いその部屋で、その部屋の主とおぼしき一人の老人がぬめりと呟いた。
「はい、確かです」
目の前の男は表面上は老人の妖怪じみた眼光を真正面から受けとめると、それだけを端的に言った。
「そうか、…それで」
「現在、確保に三人ほど向かわせております」
老人の言わんと欲することを正確にくみ取ると男は答えた。
「…」用は終わったといわんばかりに、老人はとさり、と豪奢なベッドに横たわった。
「それでは、」
「…、わかっているな」
「私は、不老不死などというものに価値を見いだせません」
背中にかけられた声に男は迷いもなく答えた。
「世にこれほどの悲願はあるまいよ」
「時は、うつろいやすいものです」
「…、人の心もな」
しばしの沈黙が二人の間に舞い降りた。
「…、行け」
「仰せのままに」

―人造人間現る―

その日　能登　源十郎は不意に足首をつかまれた。
結果、彼は焼けつけるようなアスファルトの地面と不本意なる接吻を交わすはめにおちいった。

「あうぅうー、お願いですからぁ、お、お　おちついててくださぁあぁいぃーー、なにがあっても起こってもびっくりしたりしないでくださぃぃー、ヒック、悲鳴なんかとかもあげないでくださると素敵ですぅーー、ウ、エッグ、気絶とかもしないでくださぃぃー、お願いして頼みますから一生逃げないでいてくださぃぃー。うぅぅ、生卵なんかとかもぶつけないでくださるとおありがとうございますですぅぅー、おねがいしまずでずまずがらぁーー、うううっ……」

腐った肉の匂いを漂わせる、死んだ魚のような目をした女。
それが自分を地面に転がした女性に対して抱（いだ）いた―能登源十郎の第一印象だった。

日本人形のように短めに切りそろえられたおかっぱ頭に、緑色のカチューシャをのせ、上半身だけで冗談のように転がっているメイド服の女。それが彼女を観察した結果　抱いた彼の彼女に対する結論であった。

「あうぅぅっ、お願いして頼んでみますから気絶しないで下さぁぁいよぉぉぉーーーっ」どうやら呑気に彼女を観察する源十郎が目を開けたまま気絶したものだと思ったらしい。まぁ、活きのよい内臓を飛び跳ねさせながらすがりついてくる生きている死体なんぞと、その肉体の発する腐臭とともにご対面した日にゃ、すみやかに現実逃避を決め込むのが、まっとうな人間としてとるべき態度ではあったろう。が、彼　人形師　能登　源十郎はいささかまっとうな人間

の集合から、はみ出しぎみと言われていた。

人造人間現る　その2

「で、なんの用なんだ」
「ううっ、だから警察なんて呼ばないでくださぁあいってばぁ、ううっ、これは死体遺棄事件とかじゃぁ、内容の示す微細な事実はともかく、ないんですってばぁー」
「だから、何の用だといっている」
能登　源十郎は片方の足を彼女の胴体から離れたらしい両腕に握りしめあられたまま、地面の上にどっかとあぐらをかくと頬杖をつきつつ彼女にかまってやることにした。

「ううっ、おねがいでずから逃げないで私の話を聞いて下ざいってばぁ、落ち着いてわだぢのはなじをぎいでぐだっ、

す、ぱかんっつ！

「名前は」最初に戻って再び懇願と嘆願を続けそうな彼女のドタマをはたいたばかりのゴムゾウリを持った男が、そいつで肩をトントンと投げやりげに叩きながら不愛想に彼女に向かってそう言っているのに　ようやく彼女は気がついた。

「あうあうっ？」
「で、あうあうさんがなんの用なんだ」
「えーっと、驚いたり騒いだりとか気絶したりとか、そーいうのやったりとかはしないんですか？」
「…、肝試しとかいうのならよそでやってくれ」
「ああっ、ごめんなさいいっ、待ってて下さい。置いていかないで下さいってば、見捨てないでやって下さぁぁい。ここであなたに見捨てられたならとてもとても私が困るんですぅぅ」

「それで、あうあうさんが何の用なんだ」
「ううっ、あうあうさんじゃなくて小夜子(さよこ)さんなんです。話を聞いてくれてありがとうございます、ううっ、朝っぱらからずーっとずーっと声かける人達に驚かれたり気味悪がられたり警察ざたになりかけたり、そのほかいろいろとなんやらかんやらでとても困っていたところなんですぅー、…ところでお兄さんの足のところの私の両(う)腕(で)返じでぐださいぃ、このまんま腕がもげたまんまだと這いずることもできないんでどうしょうかなーと、とてもとても困っていたところなんですぅー、ううっ、でも私、わたし博士に捨てられたなのだから両腕(うで)を返してもらってもくっつけられないです。ううっ……」

人造人間現る　その3

「で、博士っていうは」

「うううううっ、私、私　博士に捨てられたんですぅ、交通事故にあわれて五体がバラバラになったところの最愛の彼女をツギハギして生きかえらせてみれば、あーら不思議、できあがったものは生前(まえ)の記憶のズッポ抜けたあたしみたいな脳ミソスカタン女になったんできっときっと絶望してしまわれたんですぅ、うううううっ。わたス、どうじようがど思ってとりあえず誰かに人生相談しようかと思ったんですけど考えてみたら私、博士しか知らないんです。でもってかたっぱしから道を歩いているお方々に声をかけてみていたんですけど、なんか途中から相談料とかなんだかとかいうお話になってきてお金を払えと言われたんですけど、私　お金なんか持ってなぐでぇ、うううっ、じゃあ身体でって言うことになったんですけど、私、やめて下さいって言ったんですけど、無理矢理服脱がされたりしたものですから、うううっ、身体のパーツがはずれちゃって、ひどいですよね、私を置いて逃げ出して。まったく、まだ相談事も聞いてもらってないのにいぃぃぃ、それに散らかしたら元に戻すのが常識っていうもんです。それでしかたがないからなんとか自分で元に戻そうとしたのですけれど身体(からだ)の下半身を支えているところの服がボロボロになっていて、しょうがないから上半身(うえ)だけで這いずりまわりながら声をかけて、ようやっとあなたに話を聞いてもらえたなと、そういうわけなんですぅぅっ。これであなたにまで両腕(りょうて)を持っていかれたまま見捨てられたりしたのなら今度こそは口を使ってでもすがりついて呼びとめなくてはならなくなるところでした。でもでもっ、口を使ってしまいますと話しかけられなくなるですし、今度は首がもげてしまいますです、どうしましょう」

「で、結局なんの用なんだ」

まぁ、確かに彼　能登（のと）　源十郎（げんじゅうろう）といえども生首に必死の形相で足元にくらいつかれたなら問答無用で踏みつぶすかも知れないか、とか思いつつ、彼はとりあえず　辛抱強く同じセリフを繰り返す事にした。

「ううっ、とりあえず私を修繕（なおし）して欲しいのですけど。無理ですよねぇ。だからとりあえずは私の残りのパーツを集めて下さいぃっ。ううっ、今朝方（けさがた）目が覚めたら生ゴミ置き場にいてですね、寝ぼけたのかなぁとか思ってお家（うち）に帰ったら置き手紙があってですね、それには

『僕はもう疲れたよ、すまないが探さないでくれ。追伸：身体の修繕とかは自分でなんとかできるように設備は残していく、それでもだめなときは能登（のと）　源十郎（げんじゅうろう）とかいう人形師に頼め、困った妖怪とかを受け入れてくれるそうだとか言う話を古い知り合いから聞いたような気がせんでもない。』とか書かれていてですね……、

そうだっ！　今　真っ先に思いついたんですけどその能登（のと）　源十郎（げんじゅうろう）だとかいう人形師、知りません。知らなかったら捜すのを手伝って下さい。お願いしますよぉぉっ。今はあなただけがお頼りなんですうぅぅっ……」

「…」

おまわりさん現る　その1

「そこまでだ。そこの男、そう　お前だ。ゆっくりと立ちあがれ、不審(みょう)な動きをするんじゃないぞ、両手をゆっくりと上にあげろ。そしてすこしづつこちらを振り向け。よーし、そのままでいろよ。お前を死体遺棄ならびに殺人容疑で逮捕する。詳しいことは署にいってからだ」憮然とした表情で黙りこんでいた彼に高圧的な声がかけられた。

「貴様には黙秘権とか弁護士を呼ぶ権利がある。ああ、いっぺんこのセリフ言ってみたかったんだ、僕」

「はずしてやれ」

銀製の立派とも言えなくもないアクセサリーをその手にかけられたところで、落ち着いた男の声がした。

「え、先輩ダメですよ。コイツは僕の手柄なんですから」声の主に振り返りつつ男が不満そうに言う。

「そうじゃない、いいからようく見ろ」

「えーっと、その人連れていかれると非常にとてもとても私が困るなんですけど…」

能登(のと)　源十郎(げんじゅうろう)の両腕に手錠をかけた若い巡査はそこで硬直した。なぜなら彼が死体と思っていた物体(モノ)が彼に向かって泣きそうな顔でそう言ったからだ。

「能登(のと)　源十郎(げんじゅうろう)君、それは君の作品だな、いや、なにも言うんやない。君の作品だということにしろ、それが唯一ワシ達と君がいる世界で共通の言語として役に立つんだよ。いや、この場合真実なんてものはどうだっていいんだよ源十郎(げんじゅうろう)君、ワシ達の事実をグラつかせるような真実なんてものはこの世にあっちゃぁいけないんだ、なぁ、戸川(とがわ)　現実との接点を持って生きていきたいんならコイツとその周

囲と絶対に関わるんじゃない。いいな　ワシ達は　なーんにも見なかった。あの通報はどこかのドイツのいたずらでな、現場(ここ)には何も無かったんだ。納得できないか、じゃぁこうしようワシ達が見つけたのは　ぼろ布のカタマリでそいつの下に生ゴミがあってハエがたかっていた。だから第一発見者はこれを死体だと勘違いした。な、この暑さだものな。ちょいとドタマが接触不良を起こしてもしょうがないさぁね。とな、そういうわけだ。いいか　もう一度言うぞ、この仕事を続けていきたいんならこの男とその周囲と絶対に関わるんじゃない。いいな、ワシ達はワシ達の現実内で処理できる仕事しかしちゃいけないんだ。いいなわかったなわかったよな、わかったなら帰ろうな。文句とかは帰ってからゆっくりとっくりと聞いてやる。だが、お前が知りたい真実とやらは教えてはやれんがな。な、ワシ達はワシ達が許容しえる範囲外の出来事は何一つ見もしなかったし聞きもしなかったし腐った肉の臭いなんてものは月曜のゴミ置き場にはつきものなんだ。いいな今日もワシ達の担当区域にはいつも以上の出来事なんてなかったんだ」

おまわりさん現る　その2

「…、わかり　ました」
不満が顔にありありと出ていたが、初老にさしかかった先輩のただならぬ迫力におされてしぶしぶという形で戸川と呼ばれた巡査は源十郎の手にかけられた銀製のアクセサリーをはずした。
「ま、ありがとうとは言っておく」
「礼なぞいらんよ、関わりあいにならんのがお互いのためだというだけの　ただ、それだけの話だ」
「ま、それでも恩は恩だからな」
それに対する答えは返ってはこず、二人は去っていった。

「ううっ、私、行く場所ないんですよぉっ。私を哀れと思うなら拾ってやって下さいよぉぉっ、私、私の身体を修繕してくれる人がいないと生きていけないんですうぅぅっ。って、もはや死んでるんですけどぉっ。ううううっ、このままでは　わたしネズミの肉とかいって売られちゃったりしちゃうよぉぉっ、でっも、賞味期限はとうの昔に切れているから食中毒なんか起こしたりなんかしてぇ。きっと第一番目の被害者は能登　源十郎とかいう名前なんですぅぅっ！！」

必死の形相で脅迫めいた泣き落としを始めた彼女を見つめつつ、人形師　能登　源十郎と呼ばれた男は、どこか悟りきったような顔で、ただ深々とため息をついたのだった。

小夜子　居候となる　その1

「お帰りなさいませ」
その一言を発したメイド服の人物をしばし眺めやるなり、黒髪の少女は思わず叫び声をあげた。
「私以外の女を連れ込むなんてっ、マスターの浮気者っ！」
「えーと、私、…小夜子と申しましてですね。生ける屍やってますですぅ。でもでも従来のタイプと違って細胞全体が生きてたりするので”活ける屍”と呼んでやってくださいぃ。って博士が言ってましたですぅ」
「マスターが屍姦野郎だっただなんて、そんなぁっ！！　私はいったいどうすればいーのよぉっ！　生ける人形に生ける屍になる方法なんてあったかしら」
「えーと、れすねそれはそれは訳ありで本日、只今、今日よりこの家に居候させて頂くことになりまして、どーぞよろしくですぅ。しかし源十郎さんって幼女愛好趣味な方だったんですねぇ」といいつつ未だ上半身だけの小夜子さんは目の前の少女を眺めやる。

　それは小学生とみまがうばかりの身長、発展途上の胸、成熟するはるか以前の形態を保ったままの堅さのみが強調されたような腰つき、極めつけは腰まであるつややかな黒髪を束ねるいやに自己主張の強いリボンが彼女の”少女”という形態を統括している。これで市内の高校の制服に身を包んでいなければとうていこれが高校生として生活しているとは信じがたい、いや彼女は齢、数百年を生きる生きた人形であるはずなのだが、その姿にはあるべきはずの年月の重みなど微塵も感じられない。そしてそれがまた少女然とした声で叫ぶ。
「マスター、源十郎様っ。いったい全体これはどういうことなんですかっ！！」

小夜子　居候となる　その2

「えーとですね、それはそれはあるところにそれはそれは仲の良い恋人達がおりました。男の名前は結城　博士、あだ名は博士、女の名前は浅野　小夜子、つまり生前の私というわけで、男の方は多少イっちゃってましたが　たで喰う虫もなんとやらで小夜子さんはその男にズッこん惚れ込んでいたそうです。

しかすっ！

もとい、しかしそんな彼らの幸福はそれほど長くは続きませんでした。それは神の嫉妬か　はたまた運命のいたずらか　べ、べん、べん！　べんっ！！　ある日、薄幸の美少女という形容詞のよく似合う　その実とっても健康優良児であらせられた小夜子さんは交通事故に遭われてしまわれました。即死であったそうです。結城さんは悲しみました。とっても、とーっても悲しみました、悲しみのあまり普段はとんと整理もしない部屋の中を整理しました。えー、そりゃぁ整理しましたとも三日三晩徹夜で、そしてあの”マグドゥラム”とかいう秘法書の写本をみつけたのです。それが書かれたのははるか以前、落書きのような日本語でそれには確かに書かれておりました。そしてその秘法書にはなんとご都合主義な事に死体を蘇らせる術が載っていたのです」

「それでっ、それがあんたがここにいることと何の関連があんのよっ！！」

「それは…」

「それは？　んんっ？」

「それは聞くも涙、語るも涙のお話でありんす。半信半疑どころか零点五信九点五疑くらいで彼はその死体蘇生術なるものを試みました。そして彼の施した死体蘇生術のおかげさまで小夜子さんは見事

に蘇りました！！　結城さんは驚喜乱舞しました。そりゃぁもう喜びましたとも。彼女が目覚めるまでに二日、徹夜で河内音頭を踊ってしまわれたほどに。

しかし、悲劇はそれからだったのです。蘇った小夜子さんの脳味噌はスカタコでした。それだけならまだしも生前の小夜子さんの記憶がズッポリと抜け落ちてシマっていたのです。結城さんはそれからありとあらゆる手を尽くして蘇った小夜子さんに元の記憶をとりもどそうとガンバリました。どれくらいガンバったかというと三度の飯よりも大好きな五食の飯を一日に三食に減らすぐらいにガンバリました。しかし悲劇はそれだけでは終わりませんでした。なんと、あの純心でおしとやかで控えめな温室栽培な小夜子さんは、なんとっ！　超がつくほどのどド淫乱になりあそばしてしまったのです！！

小夜子　やっかいものとなる

えーと、そりはなぜかと言うと生ける屍の活動エネルギーの精気の摂取のためであるわけで、まぁ別にその性行為を楽しんでなかったかというと、そりゃまた嘘になるわけなんですけど、さてさて、そして二人はどうなったか、気になるところではございますが、べべんべっ、べんっ！　続きはまたのお楽しみということで…」

「またのお楽しみじゃないでしょっ！！」

「ううっ、頭グリグリしないでくださいよぉ、えーっとですね。ようするにあまりの超淫乱さに文字通り精も魂も尽き果ててこのままじゃ自分の生命がヤバイかなっ、と思った結城博士に愛想尽かされて捨てられたところを源十郎さんに拾われたと、そういうわけでですね。いーかげんに離してくださぁーい。いたいですーっ！！」

「生ける屍に痛覚なんてあるわけないでしょっ！」

「そんなことありませんって、そういう肉体を物理的に維持するための情報は再構築されるんですって、ほんっとにほんとに痛いんですってば」

「ま、そこらへんでやめておけ神無、ようやくその周辺の修繕が終わったところなんだから、な」

「マスタぁーっ！」

＊

「どーして、マスターは余計な者を拾ったりとかもらったりとか押しつけられたりとかするんですかっ！！」

それが彼のよさだと認識していながらも憤懣やる方もないといった風情（ふう）で一神無と呼ばれた黒髪の少女が叫ぶ。

「…、すまん、な」言われたほうの男、長身痩躯の丸眼鏡の男はさきほどから途切れもなく続く少女の不満を聞き流しつつ人体を縫

っていた。

能登　源十郎は人形師である。それも代々限りなく人間に近しい人形を創ることを目的とした人形師”源十郎”の名を継ぐ者である。そんな者にとって生ける屍を修繕する事など　何も無い所から人体と同じ人形を造り出す事にくらべればはるかに容易な作業ではある。

「ｚｚｚｚｚｚｚ……」縫われている人体、小夜子と名乗った生ける屍はその騒音の中、心地好い眠りに入っていた。ときたま思い出したかのように寝言を言う彼女を目の当たりにすると”活ける屍”という呼称は確かに適当な気がしてくる。

「だいたいですねぇ、源十郎様は　お人が良すぎるんです。今までだって関わらなくていい騒動にどれだけ巻き込まれたと思ってるんですか…、その度に、マスターと私しとの甘美な時間がどれだけ浪費されたと思っているんですか」

「ｚｚｚｚｚ……」

「…、マスターの浮気者っ！！」

いつも通りそれが神無の最後の文句だった。

「さーってとっ、それじゃそろそろ私も本格的に手伝うとしますね」

「ああ、頼む」

「まーっ　かせなさいっ！！」

「…、ところでこの娘、やたらと豊満な胸してますね、…多少削っておいといちゃダメですか？」

「……」

小夜子　ご恩返しを試みる

「ご恩返しをさせて下さいっ！！」
それが修繕されたばかりの小夜子さんの開口一番のセリフだった。
「で、何をする気だ」なぜかメイド服の彼女にそうすごまれて彼が返した言葉がそれだった。
「とりあえずは身体でっ！　て事で」
「却下却下却下ぁーっ！」
「えー、だって私　他にお返しするものなんて持ってないんですぅうっ、それにこの方法だと私の活動資源の補給もできて源十郎様も楽しめて一石二鳥なんですぅうっ」
「なーに考えてるのよっ！　源十郎様にはねぇ神無という立派な恋人がいるんですからねっ！」
「そう、なんですか？」
「神無は、家族だ」
「源十郎様ぁーっ！」
「と、いうことでは勝負ですぅっ！　どちらが源十郎様にとって役に立つか勝負なんですううっ！！」
「ふっふっふっ、受けて立とうじゃないのこれで源十郎様に私のありがたさを骨の髄にまでしみ込ませてあげますっ！！」
「負けませんよっ！、これは私の死活問題なんですからっ！！」
「おい、神無」と、呼びかける源十郎の声はもはや二人には届かないようだった。

それからの戦いは壮絶を極めた。

料理一番勝負で作られた小夜子さんの料理の出来映えは本人の「ごめんなさぁぁい、なんせ生ける屍だから味とかわかんなくてぇ、作るのは勘だけが頼りなんですぅっ！」の一語に尽きる。

続いての屋内清掃の顛末は「ごめんなさぁぁいっ、なんせ生ける屍だから力の加減がわかんなくて」という小夜子さんの声とともに屋外清掃をやるハメに陥った。

結論、小夜子さんは何もしない方が有益である。

小夜子　ご恩返しを試みた

「ま、季節(いま)が夏で良かったな」すっかと風景が賑やかになったその場所で源十郎(げんじゅうろう)は空を見上げ　呑気に呟いた。
「マスター、いま　お茶でも入れますね」
「ああ、頼む」
「ごごご、ごめんなさいいっ！！　わたしわたしいつもいーつっも失敗ばかりで、ううっ」
「ま、気にすることでもないさ」
「ううっ、お優しいんですね、不覚にも惚れてしまいそうです」
「こういうのは、日常茶飯事(いつものことできごと)だ」
「でもでもっ、これでは　やっぱりお礼にならないですぅっ、ここは私にできる唯一にして最大のご恩返しということでこの身体を好きにしちゃって下さいいいっ！！」

すぱかんっつ！！

「ダメっ！　するなヤるなっ脱ぐなっ！！　まーったく人がちょっと目を離すとこれだもの。って　アレ！？　なんか活動停止(とまって)してません。…、わー、キャーーっ、私ってばもしかして人殺しっ？　ううっ、源十郎(げんじゅうろう)様　私達はちょこっと遠くへ旅立たねばなりません。いざゆかん愛への逃避行っ！！」
「落ち着け、神無(かんな)」
「そーうーでーすーっ、ちょこーっーと、こーとーぶ殴ーってくーれーまーせーんかぁー、せぇーっしょーくふりょーちょーいーと起こーしちゃーった。みたいーですぅぅぅぅーーー」
「ちぇーっ、せっかくの名演技がだ・い・な・しっ」

す、ぱぱぱぱぱ、ぱかんっ！！

「うー、どうもおありがとうございますですぅ、ときたま私の脳ミソ接触不良起こすんですぅぅぅっ」

「ま、それはいいとして　どう？　源十郎様もアンタも私の素晴らしさがわかったでしょ」

「ううっ、よーっくわかっりましたなんですぅぅ、骨の髄まで染み込んだんですぅ。と、いうわけで、とりあえず私が二号ってことで」

すっぽ、かーんっ！！

「もうちょっと活動停止していなさいっ！！」

博士、登場してみる

「ううっ、ごめんよう。もう僕には君とうまくやっていく自信がないんだっ、ふがいのない僕を許しておくれぇ、精力のない僕を許しておくれーっ、このままじゃぁやせ細って死んじゃうんだよぉ、可愛いがってもらうんだよおぉっ僕の小夜子ぉーーーっ！！」人形師源十郎の屋敷から離れた高台で双眼鏡で小夜子達の様子を覗いていた小柄な男はそう泣きながら絶叫した。

「おまえが、結城博士だな」

「いいえ、まったくの人違いです！！」背後から唐突にかけられた声に結城博士は瞬時にさらさらっと嘘をついた。しかし、不幸な出来事は、男達の言葉は確認の必要すらない質問であったことであった。

「結城博士だな」

「…」もう一度ゆっくりと眼前から問われ、彼は不承不承、頷いてみせた。彼の目には黒く光る銃身が映っていた。

「では、ご同道願おうか」

＊

綺麗だった。空には星の海が広がり、かすかな月が彼らを照らし出していた。そこに不意に情緒を一気に踏みにじる光彩が現れた。彼がその発生源に目をやると小夜子が発光していた。

「ああっ！！　博士の危機なんですぅ」

頭を叩かれた後、首から上だけがかろうじて自由になった小夜子さ

んの第一声がそれだった。
「この前、コソコソっと真夜中に博士の心臓に埋めておいた発信器が彼の心拍数の非常なまでの異常を訴えているのですっ！！　ええっと、ええっとですね。博士の身になにかあると実際に私の死活問題なんで、最前、博士が永眠したかのように熟睡の折りにシュジュチュしておいたのが役に立ってみました。ちなみに危ういところで永眠させかけましたけれど、そんなときはそんなときで二人で腐れた仲になればいいだけの話、……、三、二ぃ、一、びーむぅっ！！」最後の言葉と同時に彼女の身体から光線が飛び出し、ある一カ所を指し示す。

「では、長らくお世話になりましたです。私は博士を助けに行きますですぅ！！」炎の決意をその瞳に宿し、なぜか、なんとなく自由を取り戻した彼女はそう言って立ち去って行った。

彼女が去った後、しばらく、彼は、呆と空を見続けていた。

「準備できましたぁ、では、行きましょう。御主人様」そこに神無の威勢の良い声がかかる。その言葉には一片の揺るぎもない、彼がそうするのがさも当然のごとくに神無は彼の側に立って居た。

「神無もたいがい…」それだけを彼は口の端にのせた。

不死の夢

「わかっているんですか！？、不老不死とは”世界”の摂理に反する出来事です。それは人間として存在する以上、望んではいけないことなんです！！」

博士は目の前に鎮座する老人相手に熱弁を振るっていた。屈強な男達に囲まれていながらもそこに怯んだ様子がかけらも見あたらないのは弁舌に夢中になると周囲の事情が見えなくなるタイプだからだろう、と男達はそれを強者の余裕を持って受け止めた。

「結城　小夜子」

「そりゃぁぁっ、もっち論。あれに懲りに懲りて今度こそ死なない彼女が欲しいかなぁっとちょこちょこっと思ったただけじゃないですかぁ、実践して何が悪いんですか！！　ちなみに本当に生き返ったというのはわりと予想外の出来事でした。まぁ、それはともかくよく言うじゃないですか、嫁は丈夫な子に限るって」老人がボソリと漏らした言葉にも博士は微塵の迷いもなく自説を展開した。

「…、やれやれ、話にならんな、貴様には選択権など始めからないという事をいいかげんに認識したまえ」言うと老人は一点を指さし、彼に見るようにと命令した。

「すいませぇぇーん、博士っ、捕まってしまいましたなんですううう、ＬｉｖｉｎｇＤｅａｄだからなんとかなるかも、とも思われたのですが、やはり基本性能の差はいかんともしがたかったですね。結論！　やっぱ、死なないだけじゃダメでしたぁぁぁぁぁっ！！」老人が指さした先の画面で、縄でぐるぐる巻きにされた小夜子さん

がいまいち緊迫感のない事をのたまわった。

「では、最愛の彼女の細胞の一かけらまでも研究対象として我々に提供するか、自ら進んで私に不老不死の秘術を授けるか好きな方を選びたまえ、だいたい貴様があの秘法書を処分しなければお互いこのような無駄な手間をかけずにすんだのだ」

「…わかりました。では、一度、死んで下さい」

彼がそう言った瞬間、殺意が銃口にのせられて博士にのしかかる。

不死への夢

「…、う、あぁぁぁ、ちょっとまってください撃たないでください、ちょこちょこっと待って僕の話を聞いてください、秘法書”まぐどぅらむ”には死体に生命を吹き込み甦らせる方法しか載っていなかったんです。生者を生きながら不死にする方法は未だ”世界”にはありません。あの秘法書に記載されている方法は一度死んだという事を”世界”自体に認識させる事で”世界”を欺むくんです。理解して下さいってば、だから”お願いですから、一度死んで下さい”っていったのは必要な手順で、最大重要事項なんですってば！！」

「…、三日やる。その間にそれ以外の方法を考えたまえ」苦虫を噛みつぶしたような声音で老人は最後通牒を突きつけた。

「ちょ、ちょーっと、待って下さい。せめて半年、いや、一年以上時間を下さいよ」返答は無言と銃口だった。

「…、わかりました。では、せめて小夜子に会わせて下さい」観念して、博士はそう言った。

＊

再会はガラス越しだった。これでは逃げる事もできないな、となんとかして逃げ出す方法を算段中であった博士は思った。しかし、どうやって最初の一声をかければ良いのだろう。なにせ自分は彼女を文字通り捨ててしまった男なのだ。

「ああっ！？　博士お元気でしたかぁ、たった半日あわないだけで

ずいぶんと血色もよろしくなったようで、ゴハンちゃんと食べてますかぁ、ゴミの日は間違えると近所のオバサン方が大挙(たいきょ)して押し寄せやってきてご近所迷惑ですよ、だからって知り合いの科(ヒ)学者のように無断で半機械化(サイボーグ)して従順化(しつけちゃ)しちゃダメなんですよ」

悩む間もなく、喜色満面といった様子(てい)で小夜子(かのじょ)は彼にいつものように話しかけてくる。

「小夜子(さよこ)…」

感染（うつ）るんです

「小夜子…」

「感動のご対面は、そろそろ終わりにしてもらおうか、なにせお互い時間の無い身であるからな」無粋な声が博士を実行力を持ってその場から連れ去ろうとする。

「あのー、ところで博士、”感動の対面、またまた冷たく愛し合う二人は引き離されるのね。泪、涙だわ私”の所、申し訳ないんですが、わたくし今、とぉーーっても重要な事を思い出しましたんですけどぉ…」

「な、なに？」珍しく真剣な表情の小夜子に嫌な予感（あせ）を―疾らせながら彼は、つとめて自分では平静を装ったつもりで尋ね返す。

「すみませーん、博士。私、今日お薬飲むの、ズッバッこーんっと忘れていてしまいましていましたぁ」

＊

明るく言い放った小夜子とは対照的にみるみると結城博士の顔が青ざめ「だからあれほど言っておいたのに…」後悔と諦念のないまぜになった声で呟いた。

「最悪の事態が発生しつつあります。全部の入り口を封鎖して、換気も止めて下さい、これ以上被害が広がらないためにもそうすべきです。まだまともな思考が保たれている間に…」

「説明しろ、どういう事だ」自分の立場をわきまえていないと思われる結城博士の命令にとりあえずは従った男が、銃口を突きつけながら尋く

「飴でもどうですか、落ち着きますよ」まるで、銃口など始めからそこに存在しないかのように博士は先ほどまでの蒼白な顔とはうって変わって自由に振る舞いだした。

「…」男は無言、効果を未だ持つのかどうか解らぬ銃口を男に突きつけたまま。

「無駄ですよ、いくらそんなものを突きつけられた所で今の僕には無駄ですよ、おや、不思議そうな顔をしていますね。では、飴は僕がいただくとして、現在、起こりつつある事態の解説を始めましょう、秘法書”まぐどぅらむ”による死に返りの法には二つの重大な欠陥があるんです。一つ目、あの秘法書どおりに黄泉（よみ）―還りの法を行うと全くの思考能力を持たない西洋で言うところのＺｏｍｂｉｅがホイサッサっとできあがります、そこをなんとかあそこまでにしたのが僕の腕というわけで、その成果が先ほどあなたが拒否されたアメ玉にと詰め込まれております。ちなみにこのアメ玉にはもう一つの欠陥を押さえる成分も含まれております。でも、喜んで下さい、あなた方の望むところの不老不死は叶えられつつあります」

「どういう事だ」どこかサバサバとした様子で語る博士に不審を抱き男が問いつめる。

「つまり」

「つまりぃ、私ってば空気感染(うつる)するんですよ」捕まえられたまんまの彼女はなぜかにっこりと微笑(わらって)んでこう言い放った。

マギ・ドラム

気づけば、自分の肉体の表面がカビのような茶色い物体に覆われるようにして変色してゆき、ぐずぐずと腐臭を吐き出していく、恐慌状態に陥いった男達の一人が彼女に向けて引き金を引いた。そして彼女の肉片が飛び散り、近くにいた男達に付着する。悪夢のような連鎖反応が続きその場にいた男達のだれもがその場にくずおれていた。「ヒィ、くるなぁ、こっちへくるなぁ、銃は使うなぁ、うわぁぁぁ、飛び散るぅぅっ！！」

阿鼻叫喚の地獄絵図が展開され、全ての男達が倒れ伏した中に一人の男がゆっくりと現れる。そして、小夜子の身体に無造作にその手を埋没させるとその身体から一つ目の不格好な人形を取り出すと、ぼそりとこう言った。「幻灯人形　多事見、さすがに五感を伴う幻覚は強烈だろう」

「君が、源十郎君か、助けてくれた事には礼を言うが、早くこの場を去りたまえ、感染するぞ」入って来た長身痩躯のその男を見もせずに博士は言う。

「心配ない、あの秘法書は一族から流出したものだ」

「そうか、という事は」ため息をつきつつ博士が見上げるようにしてその男に尋ねる。

「処置、しておいた」小夜子さんの肉体を修繕しながら、極めて無表情に青年は答える。

「彼女と一緒の生を歩むことを先程決心したばかりだが、正直な話、

自分が小夜子(ああならなくて)のようになくて良いと知って、ホッとしている」彼にというよりも独白するように博士(かれ)は言った。

「御主人(マスター)様っ、こっちの処置終わりましたぁ」言って一人の黒髪の少女が青年の側にと駆けよってくる。

「なるほど、これが神無(かんな)か、彼女に使われている秘術(モノ)を小夜子(かのじょ)に使わせてくれと言っても無駄、なのだろうな…」羨望の眼差しで一人の男が創り上げた生き人形(リビング・ドール)を見つめる。

「神無(かのじょ)がここに存在(ある)という業(ごう)をのぞく気があるのなら、考えても良い」答えは希望を含む絶望で返された。

「…やめておくよ、”Ｍａｇｉ（まぐどうらむ）　Ｄｒｕｍ”ですら僕の手には余る」源十郎の顔をしばし覗き込み、博士はあきらめたようにそう弱く笑った。

君に永遠の愛を

「気分は」

「…あ？」まどろみの中、老人はここ数十年出した事のない間抜けな声を目の前の青年に向けて発してしまった。この無礼な若者を一喝しようとしたが声がでない、いや、声ばかりか、身体の自由も利かない、恐怖が彼の思考を支配した。

「人形師　源十郎、それほどまでに望むのであれば、不老不死の秘技、その身に授けてやろう。もともとあれは我が一族から流出したもの。人という器を捨て去る気があるのならば、だがな…」

青年の発した言葉がゆっくりと老人の脳裏に浸透してゆく。彼はただ黙ってうなずいた。たとえそれが悪魔に魂を売る事と同義だとしても彼は構わないと思った。妙にぼやけた視界の中、彼は頷いていた。

次に目覚めたとき『秘法書、Ｍａｇｉ　Ｄｒｕｍ、人の魂を人形へと移す法、そして人形は人形の法に縛られる（したがう）もの。その法に縛られ永劫に生き長らえるが良い』その声が脳裏に響き渡ると同時、男達は自分たちの望みが不完全ながらも叶えられた事を知った。

＊

「そうか、という事は彼女は”小夜子”ではないのか」ため息と、やはり、という思いがないまぜになった表情で博士は彼女を見つめる。

「残念ながら、な。死んだ者は二度とは還(かえ)らぬよ」
「えーと、という事はわたしは一体誰なんでしょうか？」と見つめられた彼女は小首を傾げながら問う。
「小夜子(さよこ)、さ」
「…なぁ、小夜子、…なんで助けに来たんだ。僕は君を文字通りに捨てたんだぞ、それなのに…、」源十郎のその言葉(こえ)に何かを決心して博士は小夜子(さよこ)を見つめる。
「だって私、脳ミソカスカスな女ですから　そんな事、忘れちゃってしまっていましたぁ」
「…すまない、僕が間違っていた。君はもはや僕の愛した小夜子ではないけれど、今ここで、あらためて君に僕は永遠の愛を誓う！！」

余

私は考えました。源十郎様の『神無(わたし)は』家族だという例の一言です。そうです、あのときは冷静さを失ってしまっていましたが。よくよく考えてみれば家族というものはある意味恋人なんかよりも深い深い繋がりを持つ者同士です。恋人は別れてしまえばただの他人ですが、家族は遠く離れていてさえいてもしっかりとした繋がりの糸を持つ者同士の事です。そして初代、人形師　源十郎に創(つく)られた私が家族ということは、つまりこれが何を意味するかと言えば、つまり私は源十郎様の妻だと言うことです。普段なにかと憎んでばかりの初代　源十郎の事も今の源十郎さまに出逢うために自分が生まれて来たのだと思えば許せそうだった。「と、いうことで今日は、うるさいのもいなくなったことですし、ようやく屋敷(いえ)で久々にふたりっきりになれました。というわけで妻としのつとめを果たしにいかねばなりません。いざゆかん、愛の、…」　言って源十郎の寝室の扉をあけ、彼の元へと飛び込もうとして、神無(かのじょ)の身体が目の前でまさにいまからコトに及ばんとしているもう一人の存在を認めて凍りつく。

「えーと、ですね、つまり、なんていうか、あれから二人は激しく愛しあったりしたなのわけですが、やっぱ博士の体力が持たなかったりなんかしたわけなので、で博士(かれ)と二人の今後(ゆくすえ)を相談したその結(の)果(ち)、精力(たいりょくの)のある若者に協力していただくことにしましょうとあいなったわけなんですが…」その人物は馬乗りになって男の着衣(ふく)を引っぺがしながらのほほんとそう言い放った。

「…なんで源十郎様なわけ、精力だけがあり余っている若者なんて、巷(そこいら)にゴロゴロと溢(ころがって)れかえっているでしょうが、返答と次第によっては細胞の一片まで燃やし尽くすわよ」自分の衣服を脱ぎ捨てつつ器

用に源十郎を押さえ込んでいる小夜子を睨みすえつつ神無が問いつめる。

「その理由は単純明快です。欠陥持ちの活きている死体の私を安心しきって任せられる御方（おかた）一等博士以外には源十郎様しか見つからなかったからです。とりあえずは見知らぬ他人よりは知っている他人とそういうことなんです。あと、博士の言によると『秘法書”まぐどぅらむ”、使ったのは私、流出させたのはそちら、そのぶんの責任は分担しようじゃないか、わはははは』だそうです。と、そのようなわけで当初の予定通り私が二号とそういう事で、…ちなみに当然、博士公認です。あーとーはー、私のような娘を相手にしてくれる殿方など博士の他には源十郎様しか私には思いつかなかったものですから、…ぽっ《青面》」

「いやぁぁぁっ、聞きたくないぃぃぃぃぃっ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4465c/

君に永遠の愛を　－人形師　源十郎－

2010年10月9日11時39分発行